

モーパッサンと「真実」 —『ロザリ・プリュダン』を読む—

俣 野 肇

1. はじめに

『ニッポンの小説 百年の孤独』で、ある流行小説にふれて、高橋源一郎はこう記す。

わたしの考えでは、なにより、その小説も『野菊の墓』という小説も、「死」について書かれていることになっているはずなのに、実は「死」についてはまったくなにも書かれていない、という点が共通しているのです。¹

死だけではない。何かについて述べるとき、その何かそのものは語らずにすませてしまう。高橋は、夏目漱石の『夢十夜』について、「ソウセキという作家が、いちばん書きたかったのは、おそらく、ここに書かれた『海』のようなものでした。そして、それを、別の言葉で、すなわち『散文』でしか説明できないわたしたちは、『夢』とか『無意識』とか『存在』と呼んで、理解したような気がしているのです」と言い、数行後には「わたしたちは、やはり、それを一括して、『存在』と呼びたいと思います。そして、そこで立ち止まるのです。なぜなら、その『存在』について語る方法を、わたしたちは、知らないのです」²と述べている。

要するに、書き手も読み手も何かに「あれ」という記号を与え、記号の内容は「わかったもの」とする。「嫉妬している」ですませるのでなく「嫉妬」の言語化にいどんだロブ＝グリエの『嫉妬』を思うべきところであろうか。

本稿は嬰兒殺しを中心にした短編『ロザリ・プリュダン』を取りあげて解説し、「何か」の描写のあり方を最後に検討したものである。解説にあたっては、まず全文を翻訳し³、訳文を104のパートにわかって、各パート、あるいは数パートごとに検討を施した。

I. 翻訳

①この事件には、実際、不可解なところがあって、陪審員たちも裁判長も、共和国検事その人までも、しっくりとこないままであった。

②ブリュダンの娘（ロザリ）で、マントの町のヴァランボ夫妻宅の女中が、主人夫妻の感づかぬままに妊娠し、夜間、住まいである屋根裏部屋で出産すると、その子を殺して庭に埋めたのであった。

③これは女中が犯す嬰兒殺しにつきものの、ありきたりの成り行きであった。④しかし、ある事の説明がつかずにいた。⑤ブリュダンの娘の部屋を搜索した結果、赤子用のうぶ着一式が見つかったのだが、これがロザリ自身が作ったもので、夜ごと裁ったり縫ったりして三か月をかけたのであった。⑥この長期の仕事のため、彼女は給金のなかから支払ってろうそくを買ったが、その店のあるじが法廷に来て証言した。⑦その上、確かなことに、地元の産婆が、娘から体の状態を知らされて、助けがえられない状況で産気づいた場合に備えて、ありったけの知識と実践上の助言を与えていたのであった。⑧彼女は、さらに、ブリュダンの娘のためにポワシーの町につとめ先を探してやりもした。いまのつとめ先から追い出されると娘が思っていたからである。⑨ヴァランボ夫妻は身持ちにゆるい考えの人たちではなかった。

⑩重罪裁判の場に、二人、夫と妻は同席していた。地方でわずかな年金生活を送る二人は、自分たちの家の評判を汚したこの不しだら女に対してかんかに怒っていた。⑪彼らは裁判ぬきで即刻ギロチンに娘がかけられるのを見たかったことだろう。で、二人は憎しみのこもる証言を娘にあびせかけ、証言は、二人の口にかかる、そのまま告発となるのであった。

⑫罪人は下ノルマンディの出の十分に大人のきれいな娘で、自分の仕事をよく心得ていたが、ずっと泣いてばかりで、何ひとつ返事をしなかった。

⑬娘がこの野蛮な行為を犯したのは絶望と狂気におそわれた瞬間のことだと信じるほかはなかった。というのも、すべての事実が示すところ、娘は息子を手もとにおいて育てることを望んでいたのであるから。

⑭裁判長は、いま一度、娘に口を開かせて自白をえようとし、話をするようにこの上なくやさしくうながしたので、とうとう娘は、この場に集まって彼女

の裁きにあたっている人たちは誰も彼女の死を願ってなど全然なく、それどころか同情することさえありうるのだということ理解した。

⑮そこで娘は心を決めた。

⑯裁判長が言った、「さあさあ、まずは誰がこの子の父なのか教えて下さいよ」。

⑰このときまで娘はかたくなにそれを隠していたのである。

⑱娘は突然、怒りにまかせて彼女を悪しざまに言ったばかりの主人たちを見やりながら、こう答えた。

⑲「ジョセフさん、ヴァランボさんの甥です。」

⑳夫妻はひどく驚いて、異口同音に、「嘘だ！こやつ嘘ついている。恥知らずな」とわめきたてた。

㉑裁判長は二人を黙らせると、再び口を開いて、「話を続けて下さいな、で、どうしてこんな事になったのか教えて下さいな」と言った。

㉒すると娘はいきなりべらべら話しだし、閉ざしていた心、かわいそうに一人で抱え込んでいた打ちひしがれた心をほぐし、悲しみを、その悲しみをそっくりはき出したのであった、いま、これまで敵だ厳しいだけの裁判官だと思い込んでいた人たちを前にして。

㉓「そうです、ジョセフ・ヴァランボさんです、去年休暇でたずねてこれたときのことです。」

㉔「その人、何をしたのですか、ジョセフ・ヴァランボさんは？」

㉕「あの人は砲兵隊の下士官です、裁判長さま。㉖で、2ヵ月の間家にきていたのです。㉗夏の2ヵ月。㉘私、私はといえ何も思っていませんでした、あの人が私を見つめだし、それからあれこれ嬉しいことを言いはじめ、それからお天道様が出ている間じゅう私をもちあげて言いよりはじめたときときには。㉙私、私は心を奪われてしまいました、裁判長さま。㉚あの人、くり返して言ったんです、やれ私がきれいな娘だとか、やれかわいいだとか.....タイプだとか.....。㉛私、私はあの人気に入っていましたよ、もちろん.....。㉜だって当然でしょ.....こんなふうなこと、耳をかしてしまいますよ、女がひとりであると.....ひとりっきりで.....私のように。㉝私、この世で一人っきりなんです、裁判長さま.....話しかける相手なんか誰もいません.....心配事を打ち明ける相手なんか誰もいません.....。㉞父も母も兄弟も姉妹も、誰も！㉟兄弟が帰って

きたような思いでした、あの人が私に話かけてきたときは。③⑥それからあの人が、ある晩言ったんです、川辺に行って小声でおしゃべりしようって。③⑦私行きました、私.....③⑧私にわかるでしょうか、わかるでしょうか、その後で?.....③⑨あの人が私の腰を抱きよせて.....④⑩もちろん、そんな気はありませんでした.....なかったです.....なかったです.....。④⑪でも、できなかった.....泣きたくなりました、空気がとっても甘やいでいて.....月が出ていて.....。④⑫できなかったのです.....④⑬できなかった.....ほんとに.....できなかったのです.....あの人が、したいようにしました.....④⑭こんなことがあと三週間続きました.....あの人が来ているあいだずっと.....④⑮この世の果てまでついて行きたかった.....あの人が行ってしまった.....④⑯妊娠してるなんてわからなかった、私は!.....④⑰一月たって、やっとわかったのです.....。」

④⑱娘がわっと泣き出したので、落ちつきを取り戻すまで待つてやらなければならなかった。

④⑲ややあって裁判長は告解所の司祭といった調子で「さあ、続けて下さいな」と言った。

④⑳娘はまた話しはじめた。「妊娠したとわかると、私、産婆のブダンさんに知らせました。証言のためにそこに来られてます。⑤①で、ブダンさんが間に合わないときに産気づいたらどうしたらよいのかをききました。⑤②それから産着一式を作ったのです、夜をついで、毎晩午前一時まで。⑤③それから別の勤め先を探しました、なぜって、いまの仕事先から追い出されるって、よくわかっていましたから。⑤④でも、この家にぎりぎりまでつとめて小金をためたかった、何しろほとんどたぐえがなかったし、ちびっ子のためにお金がいりますでしょうから。

⑤⑤「じゃ、殺す気ではなかったのですかね?」

⑤⑥「そんな!もちろんなかったです、裁判長さま。」

⑤⑦「どうして殺すことになったのですか、それじゃ。」

⑤⑧それなんです。⑤⑨思ったより早くに産気づいてしまって。⑥⑩台所で、食器を洗いおえるころのことです。

⑥⑪「ヴァランボ夫妻はもう眠っておられました。⑥⑫それで私は部屋まで上っていきましたが、やっとやっと、手すりにすがってのことでした。⑥⑬で、私は床に、タイルの上に横になりました。ベッドを汚したくなかったもので。⑥⑭そ

のままたぶん一時間、たぶん二時間、たぶん三時間がすぎました。⑥⑤まったくわかりません、ひどくつらかったもので。⑥⑥それから、目いっぱい力を入れて子供を押し出そうとしたら、出てくるのがわかりました。で、取りあげました。」

⑥⑦「そりゃそうですよ、嬉しかった、もちろんね。⑥⑧ブダンさんに教えてもらったことを全部しましたよ、全部！⑥⑨それから子供を私のベッドに寝かせました、子供を！⑦⑩それから、またまた痛みがぶりかえてきたのです、でも今度のは死にそうなほどの痛みだった。⑦⑪——みなさん方、男性の方々がこの痛みをおわかりだとしても、これほどの痛みは作り出せませんよ、ほんと！⑦⑫——このせいで、私、膝から崩れおちて、それから仰向けに、床に倒れてしまいました。⑦⑬で、また始まったのです、たぶん一時間、たぶん二時間、そこで一人っきりで……それから、もう一人子供が出てきたのです……もう一人ちびが……二人……、そう……、二人……、こんなふうだったんです！⑦⑭この子も最初の子と同じように取りあげました、それから、ベッドに寝かせました、ならべて——二人——。⑦⑮こんなことありでしょうか、どうです？⑦⑯赤ちゃんが二人だって！⑦⑰私、月の稼ぎが20フランだというのに！⑦⑱どうです……こんなことありでしょうか？⑦⑲一人はいいのです、やっていけます、切りつめて……でも、二人は無理です！⑦⑳こんなことになって、頭がくらくなりました。㉑どうしたものか私にわかるのでしょうか、この私に？㉒——決めることが私にできたのでしょうか、どうです？」

「㉓どうしたものか私にわかるのでしょうか！㉔生きていく力がなくなりそうでした。㉕枕をかぶせていたのです、知らぬまに……㉖二人はおいておけなかった、おいておけなかった……で、私、おまけに、二人の上に横たわりました。㉗それから転げ回り泣き続けて、夜が明けるのが窓から見えました。㉘二人とも枕の下で死んでいました、もちろん。㉙それで私、二人を抱きかかえました、階段を降りました、外へ出て野菜畑まで行きました、植木屋の鋤を手に取りました、で二人を土の下に埋めました、できるだけ深くです、一人はこっち、それからもう一人をあっちにです、一緒じゃありません、二人が母親のことを話しあわないようにです、もし話すものなら、死んだ赤ちゃんが。㉚私にわかるのでしょうか、この私に？

「㉛それから、ベッドで寝ていてとても具合が悪くなって、起きあがれませ

んでした。⑨②医者が呼ばれ、医者がすべてを察しました。⑨③これがほんのことで、裁判官さま。⑨④どうとでもお裁き下さい、覚悟はしています。」

⑨⑤半数の陪審員は何度も涙をかんでは泣くまいとしていた。⑨⑥傍聴者のなかで、女たちがすすり泣いていた。

⑨⑦裁判長がたずねた。

⑨⑧「どこにもう一人を埋めたのですか？」

⑨⑨娘がききかえした。

⑩⑩「どっちが見つかったのでしょうか？」

⑩⑪「そう……あの子……朝鮮アザミの畑に埋めてあった子だよ。」

⑩⑫「あ、そうでしたら。もう一人の方はイチゴ畑です、井戸端です。」

⑩⑬そこで娘は激しくすすり泣きはじめ、聞く者の胸がはりさけそうなほどのうめき声をあげるにいたった。

⑩⑭娘っ子のるロザリ・プリュダンは無罪放免となった。

II. 解説

① 犯罪ものなのか、推理ものなのか。いずれにせよ、読み物を期待する読者は、この書き出しにしっかりと食いつくであろう。「不可解なところ (*mystère*) が残る「事件」であって、法廷がかかっているのであるから。

叙述の型はこの段階では明確でない。誰かしら「私」が語りかけているのか、作者が語っているのか (= 三人称客観小説)。「私」の語りであるならば「小説くささ」は免れるであるだろうが、作者の語りであるとすれば、「さあ小説ですよ」を強く共示することとなる。冒頭部の「実際」の原語は *vraiment* (= 真実、本当に)、原文では4語目に置かれ、真実性を強調する (*Il y avait vraiment...*)。「不可解なところがあったのは本当だ」との文意をこえて、「この話そのものが本当である」ことをこれは示すものであり、同時に、「真実をめざす小説」、写実主義の小説であることを伝えるのである。

陪審員、共和国検事という言葉は、もちろん、翻訳であることを即座にわからせる (表題等を見せ、この文から読み始めたとして)。検事その人まで、とあるのは、すべてを究明したのち裁判に持ち込むのが検事の役割であるからだろう。

② 原文もワン・センテンスであり、動詞は、助動詞を共通に、三つの大過去形が事実の生起順（妊娠→出産→殺害）に並べられる。實質上は単純過去として機能し、新聞記事の要領で記されている。①で事件とといったのを受けて、その大筋をまず示した。写実主義・自然主義が重視する「真実」への配慮であり、①で見たのと同様、「小説」を共示する。

事実そのものは特異なものではない。今日の日本でも同類の事件の報道は珍しくない（鈴木三重吉の「小猫」を想起してみようか。これには望まぬ妊娠をした娘が子をおろそうとする努力が描かれていた）。その事件にあった「不可解なところ」が何なのか、読者の目は先を急ぐ。

③～⑨ どこが不可解なのか、との読者の声に作者は②・③でただちに応じ、④以下で不可解なところを展開した。要するに子供を産むつもりでいたことが証拠だてられていく。新生児を迎える準備のあり方には、当然、時代が反映されているが、「念入りの準備」を読みとればすむところである。念入りなのは万一に備える心配り、出産後の職さがしにまで及ぶ。まさにその名にふさわしい（ブリュダン⁴は形容詞*prudent*を固有名詞にしたもので、この語の意味は「慎重な」である）。慎重な娘ブリュダンの、慎重さを欠いた妊娠と慎重な対処。産まれてくる子供への愛情が強調され、それがなぜ？との思いを一層かきたてる。

⑩・⑪ 女中と雇主。雇主が女中の身持ちに厳しいのは一般的だったろうか。少なくともここではプチブルの典型としてその狭量さが非難されているかのようである。部分的な描写としては事実を客観的に伝えるものであるが、焦点のあて方には作者の恣意がある（テレビカメラの客観性の嘘くささに通じる）。夫妻の心の中まで推量するのは客観からの完全な逸脱である。この意味で、⑩で重罪裁判の場に二人は裁かれる身として姿を見せ、⑪で告発されるのはこの二人であるといってよい。

⑫・⑬ ⑫で娘の有能さと美しさが示され、⑬でそのまっすぐな心、子を産み育てる意志が確認される。ヴァランボ夫妻の、いわば心身の醜さと対照をなしつつ、裁判の場に臨んだ多くの人の思いを代弁するものでもある。それでも、

「なぜ？」と疑問は解消しきれず、それが①での「しっくりとこない」という表現につながっている。

⑭ 心根がまっすぐで、女中として有能。しかし教育レベルは低く（頭のよしあしは別として）、たて社会の中で大人たちの目を恐れている。そんな娘に対処する裁判官の人柄と技量が示される。かたくなな心をときほぐし、子殺しの原因を探り出すこと。孤立しているのではない、全員がヴァランボ夫妻でないこととわからせること。

⑮～⑰ 男の名を娘はこれまで明かさずにいた。これが、なぜ明かされないかが、「不可解なところ」、ではない（それはあくまで殺害の理由である）。ではなぜ口をかたくなに閉ざしてきたか。男をつらい立場に追いやらないため、つまりは捨てた男への愛情のゆえ？明かすとつらい思いをする人が存在するから？

⑱～⑳ 男は雇主の甥であった。うかつに口にすると追い出されてしまう。㉑にあるように、嘘つき扱いされて。ここでも、㉑の「恥知らず」は、夫妻そのものにむけられているかのようだ。甥の素行すら把握せず、道徳を説く。

㉑～㉓ 裁判の場の再現報告として（報告内容を選別し、娘の心にふみ込みながら）物語が続けられる。一人で問題をかかえていた娘の心は、裁判長のやさしい言葉に、一気にほぐれた。モーパッサンの一つの主要テーマである「孤独」と関連づけることも許されようか。孤立し、コミュニケーションを取れる相手を持たないがゆえの、淋しさ、苦しさ。娘は、もともとは孤独とは無縁で陽気な人柄であったかもしれない。だから、「いきなり」心がとけた。㉓は、このような事柄の、ありふれた引き金を示す。休暇中で訪れた兵士との恋、など。

㉔で「心」と「悲しみ」がそれぞれ二度くり返されている点に注目しよう。原文では、*son cœur fermé, son pauvre cœur solitaire*であり、*son chagrin, tout son chagrin*であって、ほとんど直接つながられている。⑱の「突然」(=*soudain*)と㉔の「いきなり」(=*brusquement*)も、短い間隔で用いられた同義語である⁵。

くり返しによる効果を狙っているものとすれば、安易な手段といえようか。

②④～④⑦ ②⑥で、②③での推測どおり、男が兵士であることが判明する。以下、肉体目あての、誘惑の手口。③③から、娘が孤独であり、心の淋しさにつけこまれたことがわかる。③④と③⑤で強調される孤独。⁶③⑤からすれば、身内すべてを死が奪い去り、娘は天涯孤独の身であるとも考えられる。家族は遠く離れた地に暮らし、いま頼れる人が誰も近くにはいない、との意味で娘はこう言ったのかもしれないが。

読みは、こうして、いわば無駄な想像へと走る。無駄？……娘への感情移入に、それは影響を与えるであろう。しかし、問題は別にある。先に見た、反復である。

まず、②⑥と②⑦では「月」(*mois*)が②②と同じ形でくり返される。短文の②⑦に続けて、②⑧は同音の*moi*(=私)で始まる。主語の*je*(=私は)の前に強勢形の*moi*を置いたのには、同音に導かれた一面もあるだろう。この*Moi, je...*は②⑨のはじめに再び用いられることになる。さらに「もちろん」(*pour sûr*)が③①と④⑩に現れ、「それから」(*et puis*が②⑧と③⑥で用いられる。④⑩では「なかったです」(*non*)が連続反復され、④⑪から④⑬は「できなかった」(*j'ai pas pu*)が一度ずつ口にされる。③②では「ひとりきりで」が、*seule...toute seule*と、反復強調され③③の*seule*へと引きつながれる。「誰も」(*personne*)は③③で二度重ねられる。

いずれも話し手のロザリの特徴として意図的にとられた技法である、とみなすことは可能である。しかし、先に見た地の文での反復(②②)の直後にロザリの反復があることを考慮すれば、モーパッサンその人に反復癖があったと考えるべきであろう。意図的であればエクリチュール、そうでなければスタイル(文体)の特色ということになる。⁷この先どのように展開するのか、注目しなければならない。

④⑧～⑤④ ④⑧と④⑨は単調におちいるのを避けたもの。④⑧、娘は妊娠したとわかったときの悲しみをあらためて泣いたのではほとんどなくて、捨てられた(④⑤)ことへの悲しみの涙を流した。③⑥以下に記された、「自然の罫」⁸を利用した男への、愚かな愛。それを顧みての悔し涙ではさらさらあるまい。④⑨で「司祭」に裁判長をなぞらえたのは、ロザリの告白の場といった状況をふまえ

てのことである。モーパッサン得意の宗教批判と関連づける必要はないだろう。

⑤⑩～⑤④のロザリの話は⑤⑩～⑤⑨をほぼなぞったものである。というより、⑤⑩をもとに物語の作り手は⑤⑩～⑤⑨を記したのであって、作り手は法廷の出席者でなくてはならない。とすれば、作り手が著者であるとする限り、モーパッサンによる実話レポート（文学的表現で色どられた）を読者は目にしていることになる（作者以外の語り手を想定することはもはや不可能な段階にあるのだが）。なお、この部分では、「それから」(*et puis*) が二度用いられている他に反復はない。その一方、⑤②から⑤④までの陳述で多用されていた中断符（……）が⑤④の最後の一度にとどまっている。ロザリの反復と中断は、言い淀みとして意図されたものであったろうか。作者その人の書きぐせなのか。結論は急ぐまい。⑤⑩と⑤①、⑤②と⑤③、⑤③と⑤④の間は、原文はセミコロンで区切られている。ロザリの連続する言葉をセミコロンで区切るのは作者の介入であり、「文学」の証である。

⑤⑤～⑤⑦ ⑤④の中断符は、言い淀みではなく、裁判長に話をさえぎられたことを示している。⑤⑤と⑤⑦で裁判長は要点に入った。⑤⑥のロザリの反応（感嘆符を伴う）からすれば、ロザリはこの段階でこの質問を受けるとは思っていなかったのかもしれない。しかし、読者は知りがっている。まさにこのタイミングで、作者は裁判長にこの質問を命じたのである。裁判長のやさしさへの配慮からすれば、他の質問あるいは表現もありえたろうが、ここは単刀直入であった。⑤⑥の「もちろん」(*pour sûr*) は三度目の反復。ロザリの口癖として意図されたものか。作者の書き癖ではありえない、他の同義語なら十分にあるのだから。

⑤⑧～⑤⑥ 予想外に早く訪れた出産（⑤⑨）。⑤⑧からすれば、事情を要約的に述べ、結論をさっさとと言ってもよかったはずだ。ところが、状況が細かく語られる。だらだらと、と感じられもするところだ。教育のない田舎娘の語り口を作者は示そうとしたのであろうか。それもありうる。しかし、読者に順を追って状況を知らせるため、というのが第一の理由であるだろう。

ヴァランボ夫妻はすでに眠っている（⑤⑪）。ロザリは一人台所に立っている（⑤⑫）。夫妻と娘の、冷たい雇用関係が見える（当時、普通のことであったのかもしれない）。起こして助けを求めるなど、とんでもない。いや、夫妻が目を

覚していたとしても、その目を避けることをロザリは強いられたであろう。

⑥4では「たぶん」(*p't-être*)が三度続けられる。これも言葉に乏しいロザリを示すためのものか。一時間、二時間、三時間と並べるのもロザリの頭に浮かんだままということであろう。しかし、それが⑥5と呼応して、苦痛の長さを感じさせる。⑥5の原文では、*je ne sais point*（「まったくわかりません」）の*point*が次の語の*tant*（「ひどく」）と〔*ε*〕と〔*ā*〕で重なって、苦痛の強度の増加を表現するかのようである。⑥5～⑥6には原文では四つのセミコロンが含まれ、全体として「文学」の共示度が強い。なお、*n'point*（⑥3）、*p't-être*（前述）、あるいは⑥8の*V'là*（それ）には方言などをそのまま用いる方針が読みとれる。

⑥7～⑧2 ⑥7は、⑥6を受けた自問自答ではなく、裁判長の言葉に応じたものである。その言葉は省略された（「客観」のもとの主観）。ロザリはここでも言葉をくり返す。⑥7の「もちろん」はこれで三度目、「それから」はこの部分（⑥7～⑧2）だけで四度。強調のために同一文内で重ねられるのが⑥8の「全部」、⑥9の「子供を」（原文では直接補語の*le*と、その強勢形*lui*）、⑧1の「私」（*je*と強勢形の*moi*）、⑦3では「二人」が三度。⑦3では⑥4と同じ構造で経過時間が示される。二時間ととどまっているのは、⑥4の三時間をなぞらぬための、レトリック（作者の）結果であろう。

反復は、このように、口癖としての反復と強調としての反復の二種類にわかれ、ともに作者によって意図的に与えられたものである（意図しない、作者の癖の無意識の表出ではないと、いまや断じてよさそうだ）。言い淀みを表すのにも、中断符に加えてダッシュが登場し、文章内の真の言い淀みと、問いかけ前の間としての空白時とが区別される。「自然な」はずの文章は確かに人工的なレトリックによって練り上げられている。⑦8が「どうです（*Dites*）」で始まり、⑧2が同じ言葉で閉じられるなど、まさに芸はこまい。

⑧3～⑨0 ⑧3は自問自答である。ここから新しい段落としたのは文学上の配慮。⑧1の反復から段落を始めた。ロザリ自身の強調を、さらに強調するものである。段落の終わりは、言葉は方言にかわるものの、同じ表現であって、⑦8に対する⑧2と同じく対応が意図されている。

「それから」（⑧7）、「もちろん」（⑧8）とロザリの口癖をちりばめ、中断符（⑧5、

⑧⑥)で言い淀みをさし示す。セミコロンによる分離もひとつ。*e*の脱落 (*j' suis, l' potager*など) も多くなり、ロザリのせき込んだ話しぶりがまぎまぎと浮かんでくる。⑧⑥のあと中断符は消え、ロザリは一気に語りおえようとしているかのようである(読み手に疑問の解決を一挙に見せてカタルシスを覚えさせる—推理小説の、一堂に会した関係者を前に探偵が真実をあかすのと同様の技法)。作品のはじめの「不可解なところ」「しっくりとこない」ところは、こうして解決を見た。真実をあかすにつれてロザリの口調が「よそゆき」から「地」の言葉へと変わっていると思うのは誤りであるかもしれないが、⑧③の*je sais*から⑨①の*Je sais-t-il*への変化にそれを認めることを完全に否定することもできないのではないだろうか。⑨⑨で「死んだ子たちが母親のことを話しあう」というところには、ロザリの迷信深さが示され、そのような女性であればこそ、男にだまされもすれば、不運に適切な判断力をもって対処することもできなかったのだと作者は言っているようにみえる。子殺しを「知らぬまに」(⑨⑤)ロザリは犯したのであった。

⑨①～⑨④「それから」(何度目か)で始まるこの部分は、原文では方言の濃度を高めながら、あっさりとした事実の伝達に終わっている。これまでの話しぶりからは一転して、急いで話をしめくくった。ロザリ自身が「要点は伝えた」と判断したからであろうか。しかし、その判断力があれば、これまでの話しぶりは別の形をとっていたであろう。読者に伝えるべきは伝えた、との作者の意図がロザリの口を閉ざさせた。繰り人形としてのロザリ(⑨②など、くどくど話してもよいはずである。)⑨③の「ほんとのこと」(*vérité*)という語は、もちろん、読者にむけられたものであり、「真実の伝達」という作品の目的がこうして果たされた。⑨④はロザリの純な人柄と、その言葉の真实性をアピールするものである。

⑨⑤・⑨⑥ この二文は法定内の「客観描写」である。この場の報告者＝作者(前述)が見たままの。しかし、他のものはカットして、この二つについて報告をした(主観)。厳密には⑨⑤の「泣くまいとしていた」は解釈である。この二文に客観性を与えるには、「作品」のはじめに「私が見たまま聞いたまま思ったままを伝える」の一言が欠かせない。だが、そうすると、一つの立場か

らの報告となって、全体の客観は手にすることができない。⑨⑤の「泣くまい」、原文の否定形式は*ne point*であって、⑭で一度使われ、ロザリの言葉として⑥③と⑥⑤に用いられている。作者の好みの反映かどうか。地の文として用いるには、今日では古さを感じさせる否定形である。

⑨⑦～⑩② この部分のやりとりは、犯罪捜査上の詰めにかかわるもので、これとともに物語も詰めあがる。ロザリにとっては重要なことではなく、告白からもれ落ちた。どこに埋めたか、まで語るのが切なすぎてわざと言わなかったのではないだろう。⑩⑩および⑩②の口調は事務的にみえる。むろん、なまなましい記憶を遠ざけようとする無意識がとらせた言い落としであり反応であると考えられることも許される。

⑩③・⑩④ ⑩③は④⑧と同じ構文(*si...que*)であり、ロザリの泣き声と周囲の反応という内容構造も反復されている。ロザリの告白の最後である⑨①から段落が短く(会話を含め)なっているのは、物語がゴールにむかってまとめあげられていることを示すものである。

⑩③でロザリがすすり泣くのは、すべて語り終わった開放感を含みつつ、悲運全体をふり返ってのことであろう。子殺しの反省という一点にはしほれない。あるいは、裁判長とのやりとりで、二人の子を埋めた場面をまざまざと思い出した結果であろうか(⑩③の「そこで」はこれを支持するかもしれない)。

モーパッサンの筆の急ぎは、あらゆる枝葉を取り払って、予想された最後の短い一文へとたどりつく。最後の一言で、あたかも作品そのものが、あるいは作者その人が、放免された(*acquité*)かのように。

III. 結び―「真実」と死をめぐる―

『ロザリ・プリュダン』がテーマとしたのは「真実」であり、「真実」としての子殺し⁹の実際である。そのテーマは、「なれあい」的⁹了解をこえて伝えられているであろうか。

解読を通して明らかになったように、本作は三人称客観小説である。それも、ロザリの裁判の場にいた者の報告という形でしかありえないので、モーパッサ

ンその人が裁判を傍聴していたことになる（既述）。したがって、その目を通しての「真実」、またロザリ自身の言葉の「真実」が問題となる。

作者は、Prudentという命名に始まって、話の山場を効果的に演出するための事実の巧みな選別と構成、ロザリの言葉の「文学的」分節（セミコロンの使用）などを通して、「ありのままの真実」ではなく「演出された真実」を伝えたのであった。構成面では、構文の反復、ロザリの用語の反復など、反復が特色となり、強調や人物像の造形を支えていた。しかし「別の見方」は全く顧慮されることがない。ロザリが真実を述べていることは、ほら、これこれの様子から明らかなはず、と読者に目くばせをし、読者は（陪審員は）見事に説得されるのである。ロザリが「知らぬまに」（85）殺したのかどうか¹⁰、問題にされることはない。

作者の語りの「真実」は結局なれあいの真実でしかなかった。冤罪あるいは「いじめ」と同じ構造（流れの方向は逆であっても）である。そう、事件を物語ることによって事件そのものからは遠ざかった。高橋の指摘はあてはまった。

ロザリ自身の語りについてはどうか。真実は正しく伝えているのではあろう。しかし、読者は彼女の涙を真に共有することができるであろうか、なるほど「すすり泣く」（sangloter）という動詞は共有されてはいるけれども（96と98）¹¹。涙は「ロザリの悲劇」を演出するための記号ではないのだろうか。

ロザリは「とても具合が悪く」なった（91）。しかし、まるで産後の肉体上の苦痛を言っているだけのようで、殺した後の苦悩は「言わなくてもわかっていてでしょ」とばかりに省かれてしまっている。いや、殺した直後の場面でも（87）、心の動きは示されない（外部描写で内部を描くというモーパッサンの方針は、告白する人物についてあてはめることはできない）。さらに言えば、二人を埋めたことに関しても、誰かが彼女の行動を見て証言しているかのようで、ロザリの心の動きは何一つ伝わらない。何度か同じ話をくり返させられるうちにまとめあげられた記憶としてなら受け入れ可能だが、彼女はここで初めて「真実」を告げているのである。たぶんヴァランボ夫妻によって医者が呼ばれたのであろうが、そこはカットしたのちに「これがほんとのこと」と彼女は言った（93）。ロザリの話に、全体的に真実レベルにあるとしても、どれだけの真実がカットされているのか、知れたものではない。

でも、その「カット」は真実をゆがめるものではない、わかっているよね、

と作者はウインクし、読者も頷き返す。ここでも肝心なところはぼかされたまま、高橋の指摘はロザリの言葉に関しても、しっかりとあてはまった。

註

- 1 高橋源一郎、『百年の孤独』、文藝春秋、2007、p.104。
- 2 同書、p.439-440。
- 3 使用テキストは Maupassant, *Contes et nouvelles* II (Gallimard, «pléiades», 1979) 所収の *Rosalie Prudent* である。
- 4 「登場人物の名前は運命の皮肉を意図して与えられる場合がある」として Togeby があげた例に、ロザリ・プリュダンをつけ加えることにしよう (cf. Knud Togeby : *L'œuvre de Maupassant*, PUF., 1953, p.146)。
- 5 「突然」を意味する語の多用・偏愛はモーパッサンの特色である。拙稿「Maupassant : *La Petite Roque*を読む」(武庫川女子大学紀要 第30集〈1982〉)を参照。
- 6 *Delaisement* はモーパッサンの登場人物たちの孤独を「強迫観念」(*psychose*) と呼んだ (Gérard Delaisement : *Modernité de Maupassant*, Rive Droite, 1995, p.109)。ロザリの孤独もこれにあてはまるだろう。今の日本でいえば、専業主婦のままで終わることへの不安といらだち、孤独感に相当するのかもしれない。
- 7 バルトの区別による (ロラン・バルト、『零度のエクリチュール』〈みすず書房〉を参照)。
- 8 *La nuit* に関して Nafissa A.-F. Schasch は、「この夜、ほんの数時間前に大きな喜びの源であった夜が、突然、彼の苦しみのもととなる」と記した (当然の要約であるが)。原因こそちがえ、夜はロザリにも不幸をもたらした、二度 (裏切りと出産)。cf. Nafissa A.-F. Schasch: *Guy de Maupassant et le Fantastique ténébreux*, Nizet, 1983, p.139。
- 9 アンリ・トロワイヤは、モーパッサンの私生児テーマにふれてこのテーマの扱われ方を列挙したが、子殺しに言及するのは忘れたようである (cf. Henri Troyat : *Maupassant*, Flammarion, 1989, pp.184-185)。
- 10 Togeby は前掲書で「職を失うのがこわくて、双子を殺した」という (p.85)。

心のどこかにそんな気持もひそんでいたであろうか（疑問の度合いは強いが）。

- 11 Togebyはまた、「裁判ものでは傍聴人たちが物語と情動的に応じ合う」（*ibid.*, p.141）と指摘し、本作の「泣き」をその例に含めている。